

<寄稿> 道伝はるか「東京在住作家から見た小樽の魅力」

0 はじめに

<著者プロフィール>

津田塾大学学芸学部英文学科在学中にシェイクスピア劇をはじめとした演劇に熱中する。米国オハイオ州にあるケント州立大学大学院などで free writing の指導法を学び、専門学校の英語講師を務めた後、2009年12月、小樽舞台の小説「輝きのロザリオ」(文芸社刊)を出版。昨年「小樽雪あかりの路11」の時期に、小説の舞台となるまちの取材のため、初めて訪れて以来、小樽の情景を思慕している。

<ごあいさつ>

かつて東京23区内に住んだとき、散歩好きな私は、歴史的遺産を目当てに都内を散策することをささやかな休日の楽しみにしていた。旧古河邸の洋館や薔薇庭園、岩崎弥太郎邸などが好きで、敷地内を歩く度に明治か大正時代にタイムスリップしたかのような感覚に浸った。しかし、帰る道すがら、交通量の多い道路や混み合った電車を避けられず、建築や庭園の美を見ることで心癒され、せっかくほころんでいた顔つきも、またたく間に険しいものに戻ってしまった。うかうかしていたら大型道路沿いの狭い歩道から身体がはみ出し、車にぶつかるかもしれない。都心部に出かける度に、私にはいつもそんな緊張感が生まれる。騒音、排気ガスが多い環境では、不快感が生まれ、安らいだ気持ちで物思いにふけることがむずかしくなる。

東京出身と言うと、六本木や渋谷などで過ごす休日を楽しんでいるイメージを持たれることも少なくない。しかし、休日くらい都会の喧騒を避け、静かな生活をしたいという声や、代々、古くから都心や下町に住んでいる人たちが、「昔はもっと環境がよかったのに、すっかり住みにくくなった」という話もよく耳にする。

過去4回、計1か月ほどの小樽滞在で感じたのは、落ち着いて物思いや思索にふけることができるということ。目や頭を楽しませてくれる文化的な遺産としての建造物があちこちで息づいていることを感じながら。

小樽に住む方々には、歴史、文化、景観などに誇りを持ち、世界各国から訪れる人たちを今後とも惹きつけて頂きたい。都会で失われたものを多く残しているからこそ、小樽というところは国籍を問わず不思議な懐かしさを持って人の心に語りかけてくれる。

心を落ち着かせ、大切なことを教えてくれる場所。小樽という土地に魅了された者の一人として、特にどういった点が心に残ったのかをお伝えしたい。まず初めに、過去1年間、計4回の小樽滞在において印象深かったことをお伝えする。次に、「小樽案内人」のテキスト(小樽

観光大学校認定・検定試験公式テキストブック)を学習資料として、小樽という土地について学び、小樽市内の文化、社会教育的施設などを訪れ得た知識などと合わせ、一旅行者、一学習者、一観察者として考えたことを記述する。小樽の今を知る上で最新の情報を取得することができる媒体として、「小樽ジャーナル」、観光事業者のHPも学習用の参考にした。旅行記、学習記、観察記の様相を呈した今回の寄稿が、私のように継続的に来樽したいと思う小樽ファンを増やしていく上での、何らかの参考になれば幸いと思う。なお、本寄稿において掲載した写真には、自分自身が撮影したものでないものが多く、この点については「小樽ジャーナル」が過去の記事のために撮影した写真および「小樽ジャーナル」に提供された写真を転載するという立場で、同メディアと写真の提供者の許可を頂いた。以後、おつきあいの程、よろしく願い申し上げます。



日本銀行旧小樽支店
(写真提供・小樽ジャーナル)

1 全体的な土地の印象

雪が舞い降りる運河の散策路を初めて歩いたとき、石造倉庫群が白銀の衣装に身をつつまみながらも、味わい深い重みのある面持ちをしていたことが印象に残った。商都としての繁栄、いくつかの戦争、戦後。良い時も悪いときにも、人と共に時代を生き抜いてきた石造倉庫群は、今に昔を教えてくれる大切な存在。

そんな小樽の象徴とも言える倉庫群と時を前後して建てられた歴史的建造物が、小樽市内の至る所に残っているが、建物や景観の保護が徹底していると感じた。小樽市がこれまでに歴史的建造物として指定し残っているものは66棟にもおよぶと言ひ、小樽市内の中心街だけでなく幅広い範囲に存在している。まずは素晴らしい町並みを保存している小樽という土地のPRの一助になればという思いで、私自身の小樽滞在について書かせて頂く。

<2009年2月～2010年2月までの計4回の小樽滞在の流れ>

冬、春、夏、冬（残念ながら秋は多忙で行けず）、約1週間ずつ、合計1か月ほどの小樽滞在を楽しんだ。滞在中は建築探訪、散策を繰り返した。小樽市内のどこに行っても感じることができたのは、懐かしい匂い。大通りや路地裏、自然の中に漂う郷愁。街中では新鮮で美味しい海の幸などに舌鼓を打った。地図を片手に道を尋ねたとき、親切に行き方を教えてくれる人の温かさを感じた。地元の伝統工芸品、ガラス細工が創り出す繊細で精巧な美に見入った。街を見下ろすことができる天狗山に何度もロープウェイなどで昇り、果てしない空との一体感がある場所からスケールの大きいパノラマを見た。小樽公園やその周辺の緑豊かな環境が気に入り、天気の良い日に四季折々の情景を楽しむため、歩き回った。

<全体的な土地の印象>

街を取り囲む山々や海が常に自然の息吹を感じさせてくれ、「自然、人間、文化の調和」を感じることができる。どこか独立した雰囲気のある、まとまりのある世界、というのが、私の小樽についての全体的な印象。こうした印象がどこから来るのだろうかと考えたとき、平野部とは性質を異にする小樽の地形から来ているのではないかということが、とにかく頭に浮かんだ。

～日記より～

山と海に取り囲まれているという地形が、小樽という土地に、一種の独立した雰囲気

気をもたせているように思う。そこは着物でいうとすっぽりと物が入る袂のようなところ。袂は奥が深く、新鮮で美味しい食べ物、人の温もり、ガラスや伝統工芸、歴史的建造物など、多くの宝物が大切に残されていて、魅力ある「暮らし」と「観光」の両方をささえているような気がした。

逆説的に言えば、多くの宝物を守って行かなければ、「暮らし」と「観光」の土台が失われることにつながりかねない。宝物を守っていくためには、住む人も訪れる人も、小樽にふさわしいものを求める必要がある。

小樽を訪れ、とにかく感激したのは、山と海に囲まれた街の中に、一貫性があること。街全体が「郷愁」や「ノスタルジック」という一貫したテーマでコーディネートされているかのようだ。最初に降りる駅舎。北一硝子が寄贈したというランプが昭和初期の面影を残す建物によくマッチしていた。北のウォール街を象徴する建物を従える大通りは過去の大繁栄を想わせて圧巻。やがて大通りは運河や倉庫、商店街や路地裏などにつながる。歴史とともに作り出されたものを取り囲む海や山々。その中に、人、文化、芸術が存在し、全てが郷愁をそそる小樽という街の重要な要素になっている。

こうした一貫性のある場所を訪れる以上、旅行者には小樽らしいこと、小樽に似合ったことをして、小樽らしい物を買ってもらおう。旅行者も住む人と同様の意識を持つことが小樽の経済を安定させ、美しい町並みを守り続けていく上で重要だと思う。旅行者が海外の高級ブランド品を買いあさるような光景が小樽に生まれたいよう、気をつける必要がある。小樽には観光の目玉がいっぱいある。イベント、お祭り、建築探訪、文学散歩、自然散策、食、お酒、喫茶、お土産探し、ガラス、工芸製作体験、温泉、乗馬、スキー、絶景探訪、船旅など、私自身もまだ体験していないことがこの中に多くあり、次にはあれをしたい、これをしたいという思いで、市のPRビデオにもあったように、「再会の街」を訪れることを楽しみにしている。

～日記より～

「日本海を望める港町では、異国とつながる海がとても近くに感じられ、清々しい風を感じた。坂の上や天狗山から街と海を見下ろした時の爽快感が胸に残る。運河の散策路を歩いていたら、色々なことが頭に浮かび、ついつい詩で表わしたくなった：

「シンフォニー」

ここにあるのは シンフォニー

海・まち・山のシンフォニー

ここにあるのは シンフォニー

自然と人の シンフォニー

ここにあるのは シンフォニー

昔と今の シンフォニー

ここにあるのは シンフォニー

今から未来の シンフォニー